

2016 Jikji International Road Race レポート 第3ステージ

2016-0518 発信

大会 3 日目、第 3 ステージ。

第 1 ステージ終了後、今朝まで同じホテルに連泊した。国立公園の中？ 入口の街にあるホテルで風情のあるロケーションでカラダを休めるのには良いかも？

今朝もホテルの前の食堂で 6:30 に朝食を摂りレースに備える。昨晚も 2 名の選手にマッサージを行い今日に備えた。結果（成果）に対するご褒美？ みたいな感じになってはいるが、翌日以降の走りに大きく影響が出ることで選手たちのリクエストも真剣そのものである。

昨晚のうちに食堂にリクエストを出してあるので食事は問題なし。スタッフは毎日と同様に高炭水化物の食事を摂っているのだから今朝はコンビニのコーヒーのみで胃を休めた。

今日の第 3 ステージについても、選手のレポートを中心にまとめる。

栗原 悠（千原台 3 年）

監督の助言通り、初めのアタックに注意しチェックにはいる。チェックしたアタックが見事に決まった。

先頭グループには自分と佐藤君が入った。前半はかなりのハイペースでレースが進んだ。登りはたいしたことなかったが、頂上付近から降りにかけてのアタックと、平坦でのハイペースやアタックに脚を奪われた。そして佐藤君が丘陵でふいふ落とされた。後ろに下がり佐藤君を戻すことの出来る余裕は自分にはなく断念した。その後、一時ペースは落ち着くもすぐにハイペースに戻った。やはり韓国の選手のパワーには驚かされる。そうこうしているうちに残り 4km 地点を過ぎ、残り 1km までハイペースで進み、1km 地点過ぎたあたりでスプリントに備え、牽制にはいる。

自分は強い選手をマークし、最低 3 着は獲れると判断、最終スプリントに入った。逃げる中で一番強く目立っていたのが韓国の 71 番選手だったのでこの選手の流れに乗ってスプリントしたが、その選手はまったく伸びず、すぐに切り替え横に出るがその選手にはねられ、追い込めず 6 着ゴールとなった。

レースを振り返ると、今までの 3Stage を通してやはりパワーには敵わない。それでも勝つためには、現段階では、知力と判断力、テクニックで上回るしか勝つことはない。昨日、チームで動く決めていたことが今回の Stage では形になったと思う。残り 2Stage もチームで動くことを意識し、勝ちに行く。

満田 光紀（千原台③）

今日のコースは全体的に下りが多いコースで、距離 113km のレースだった。

レースは 9:30 スタート、パレード走行を 3km ほど行った後、解除されリアルスタートした。

スタートした後、4.5 回連続でアタックがあり、それをきっかけに逃げ集団ができた。その後の上りでのアタックで更に 1 つ追走集団が形成された。逃げ集団にはチームの 4 人が加わり、自分ともう 1 人は集団をコントロールした後、集団の後方で休んでいた。集団のペースはあまり上らず逃げ集団との差は 15 分まで広がった。ルールでは 10 分で打ち切りだったが、小集団が細切れで点在したことによる温情措置？ ゴールでは集団スプリントとなり韓国の選手は残り 1km というはい段階でスプリントを始めそのままスピードを落とすことなくゴールした。

今日「チームの走り」ができたと思う。明日は自分も TOP グループでステージの優勝争いがしたい。

相葉 健太郎（九州学院 3 年）

今日のレース展開は、ミーティングで話した通りになった。

最初の 10 キロあたりで最初の逃げができた。2 位の人をマークしていたが、第 2 集団にもついていかなかったので逃げに乗れなかった。後で追いかけてやろうとしたが抑えられて前に出ることが出来ず、前に出た時はもう手遅れだった。

最後の集団についている時、一番後ろはきつかったので、登りで前に出た。途中落車したが集団に戻れてよかった。ゴールは最後だったが完走できて良かった。

佐藤 健（九州学院 2 年）

今日も昨日と同じ 9:30 出走だった。コースは昨日と同じスタート地点からの片道コースで、2 カ所の丘を含む下り基調の 114km。今日はチームを 2 つに分け、「交互にアタックに反応する」という作戦で挑んだ。

リアルスタート後、8km 地点でファーストアタックがかかったが、それはすぐに集団に吸収された。最初の短い登りの登りはじめに韓国の 124 番選手を中心とする 5 名程度の選手がアタックをかけた。日本チームからは、そのアタックに栗原君と僕の 2 人が反応し、12km 地点で 7 名の逃げ集団が形成された。

その後 3 名の追走集団が追いつき、10 名の集団になった。そこから 16 名の追走集団との差は徐々に開いていった。

補給開始を少し過ぎた 46km 辺りから一旦ペースが緩み、脚を休めることができた。

昨日までは差別紛いの行為がひどかった韓国の選手も、今日はコミュニケーションがとれ、集団内はとても良い雰囲気だった。その後 52km 辺りからまた集団ペースが上がった。

その後もう一度集団ペースの上下があり、76km 地点の短い登りでペースが上がり、その手前で脚を休められていなかったため、登り終わりのペースアップに付いていけず、集団から 1 人だけ千切れた。

その後トラブルで停まっていた逃げ集団の人と 2 人でローテーションをし、追いかけたが、その選手にも千切られ、単独走になった。

90km 地点で 16 名の追走集団に吸収され、なんとか付いていっていたが、99km 地点で千切れ、そこからは再度単独走となった。ゴール前 1.5km で後ろの集団が見えたが、その集団からは逃げきり、26 位に終わった。

個人の目標としては日本チーム内で 3 位以内に入り、チーム順位に貢献することだった。

展開としては良かったが、実力差を感じたが、逆に自信を持てた箇所もあったので、残り 2 ステージ、チーム順位を少しでも上げ、ステージ優勝者をチームから出せるようチームに尽くしたい。

花田 凱成（祐誠 3 年）

今日も昨日と同様、9 時半スタートだったのでそれに合わせて朝食とアップを済ませスタートを待った。スタート後、最初の登りで少し集団がバラけて逃げの集団が出来るが、位置取りが悪く逃げに乗ることが出来なかった。すぐに追走集団が出来たが上手く協調がとれなくて、なかなか差が縮まらなかった。成海と僕で集団を抜け出すも逃げグループを捕まえることが出来ずに吸収された。そのまま逃げグループから、タイム差を広げられ、集団スプリントでフィニッシュした。今日の反省は、スタート後すぐに前に抜け出せなかったことだった。明日は、スタートから、もっと前に前に位置取りして、レースを組み立てたい。

成海 大聖（普天間 2 年）

レーススタート 1 時間前にアップを開始し、バイクチェックを受け、スタートラインに並んだ。

昨日と同じ時間で並びに行ったがすでに他チームは並んでおり、最後尾のスタートとなった。

スタートとして 5 キロはパレード走行があり、その間に車線左側を目一杯使い前に位置した。その後リアルスタートがきられアタック合戦が始まった。

昨日のミーティングで予想していた通り、15 キロ地点にある下りまでに勝負を決めたいと動くチームが多々あり、そのアタックに加わりレースを少しずつ動かしていった。

日本チームはそのアタック合戦の中うまく連携し栗原君、佐藤君を先頭集団に送ることに成功した。

カウンターアタックを見逃さず反応した 2 人の走りは素晴らしかった。2 人の入った先頭集団は 8 名程であり、うまくローテーションができていた様子だった。僕はその逃げを集団前方で見ながら距離を見て、セカンドグループを作る事を考えた。

登りの終盤でペースをあげ何度も単発的なアタックを仕掛けた。その結果 15 人程のセカンドグループができた。

ここには同じチームの花田選手もいた。セカンドグループはローテーションをうまく回しスピードを落とさずに走った。

速度は平坦で 45 キロ以上を普通に出すハイペースであった。グルペットとの差が 2 分 30 秒まで広がりそこでようやく落ち着いた。その時点で栗原君含む先頭集団との差は 3 分あった。

このセカンドグループには前日の優勝者でリーダージャージを着用している選手とそのアシストが 2 名いたため、レース終盤に差し掛かると先頭集団との差をつめるためにペースを上げる動きがあり、15 名いた集団も 12 人程に絞られた。

ラスト 5 キロまではそのペースアップが続いたがその後、リーダーチームが諦め、ペースが落ちた。

そのタイミングで 4、5 名の選手がアタックをかけセカンドグループから逃げ、差を広げていった。ここで僕は当然、その逃げにのる必要があったが一瞬躊躇してしまいチャンスを逃した。とても悔しい。

その後、8 人のスプリントになり、3 着でゴールとなった。全体では 18 位であった。

今回の反省点は勝負どころで油断し、チャンスを失ったこと。明日のレースはそれを修正し 1 つでも順位を上げたい。そして残り 2 ステージでチーム総合順位を上げるようにみんなで協力したい

優勝争いを演じる上位選手が絞られつつある中、チームとしては一つでも順位を上げる、少しでもタイムを稼ぐために何が出来るかを考えて第 3 ステージのスタートラインに並んだ。選手からの情報、アテンド、マッサージをお願いした韓国チームの保護者の方からの情報、コースマップ（正直、参考程度で鵜呑みにすると痛い目に合う？）、過去の傾向からチームの動き、選手個々に指示を出した。

このステージでは、予想した展開がほぼ的中し、流れに乗ることが出来た。現在、日本ではステージレースはなく、5 日間連続でロードレースを走ることがない。身近な環境下でこの経験ができることは大きな収穫である。

体力の消耗もさることながら、毎日が未経験の連続、また、慣れない生活環境下での多くの経験を積んでいる。

この短期間ではあるが、選手の順応性は素晴らしく、毎日のレースのみならず、日常生活の中でも「目に見える形」で成長が見ることができる。

この経験を自分だけのものではなく、所属校、都道府県での活動に生かして欲しいと思う。

この機会を頂いた全国高体連、いつもご支援頂いている（公財）JKA、所属校のご理解に感謝したい。

文責：中田（全国高体連自転車競技専門部）



<スタート前 MTG>

野田コーチより、昨晚の MTG 内容の確認 & 指示。集団前方に位置し、前半から積極的に動くことを確認した。

気温が上がるのが予想されるので、水分補給をこまめに。また補給が必要な際は早めにサポートカーを呼ぶこと。



<スタート前①>

前日のレースの表彰後、リーダージャージ着用 の 2 名が先頭へ（イエロー：総合 1 位、ホワイト：総合 2 位の選手）

この後パレードスタート、パレード解除直後より、アタック合戦が始まる。



<スタート前②>

後方からのショット。アナウンスが入って 3 分でこのような体制が整う。レース慣れしている部分もあるだろうが、とにかく無駄がなくスムーズ。



<スタート前③>

選手の様子。

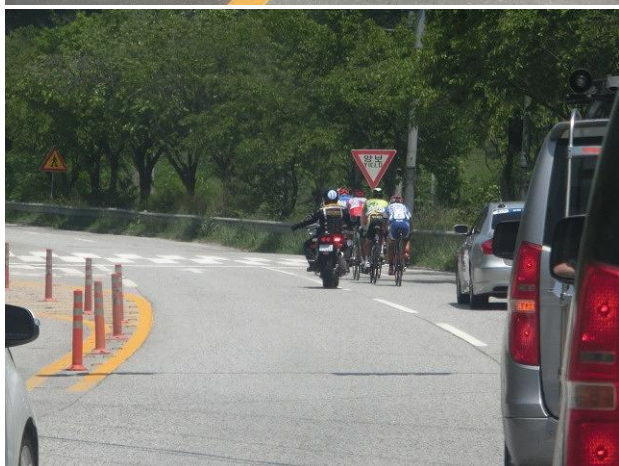
疲労は蓄積してきているが、表情は明るい。



＜チームカー車列＞

チームカーのみで 18 台、その他競技・運営の車両を加えると 40 台（バイク除く）近くの集団となる。機材トラブルで車列を離れると戻るのにも時間が掛かる。トラブルがないことを祈るのみ。

対向車は選手団が来る前に MOTOCOM が抑え選手団の通過を待つ。完全通行止めではないので対向車は普通に来る。



＜エスケープ集団＞

栗原悠含む 7 名の先頭集団、残り 20km 地点での様子。前日の総合 1 位の選手を除く、個人総合上位の選手はほとんど入っており、ゴール前の牽制が始まるまでは、意思疎通もスムーズだったとのこと。



＜サポートカーからの補給＞

補給だけでなく、選手の様子や集団の情報収集など短時間で多くのやり取りをする。



＜サポートカー荷室＞

選手、スタッフのスーツケース、スペアホイール等、荷室はいっぱいの状態でレース中も移動する。今回スペアバイクも持参したが、チームのサポートカーに積めないで、アテンドの友人の方に運んで頂いた。